

第3章 不安感・リスク知覚・地域状況などの因果関係の分析

この章では、犯罪被害の不安感（問5）、リスク知覚（問6）、地域状況の認識（問38 など）などの項目間の因果関係について、構造方程式モデリング（SEM ; Structural Equation Modeling、以下、SEM と表記）による分析を行う。

1. 分析計画

検討対象項目間の因果順序は、概略、次のように想定されよう。

地域状況の認識（問38 など） → リスク知覚（問6） → 不安感（問5）

さらに、これらの変数に影響を与える原因系の項目として、地域特性（都市規模、警察管区など、地域そのものの情報）、個人属性（家族構成、住居属性なども含む）、被害経験（問1）などが考えられる。

(1) 分析対象変数の数値化について

地域状況の認識は問38の15項目に加えて、警察の地域防犯活動に対する評価（問36、問37）の4項目を加えた18項目を用いる。リスク知覚（問6）と不安感（問5）は被害の種類を表す共通の20項目に対して、自身や家族が「被害にあう可能性」「被害にあうのではという不安」を、それぞれ聞いている。これらの設問はいずれも4件法であるが、この章の分析においては、1～4の選択肢番号の値をそのまま数値変数として扱うこととする。なお、数字が小さい方が、問5：不安がある、問6：リスク知覚がある、問36と37：警察活動が行われている、問38：地域状況が悪い、という意味となる。

地域特性、個人属性など、より原因系の項目については、適宜、数値化やダミー変数化を行うものとする。

(2) 被害経験について

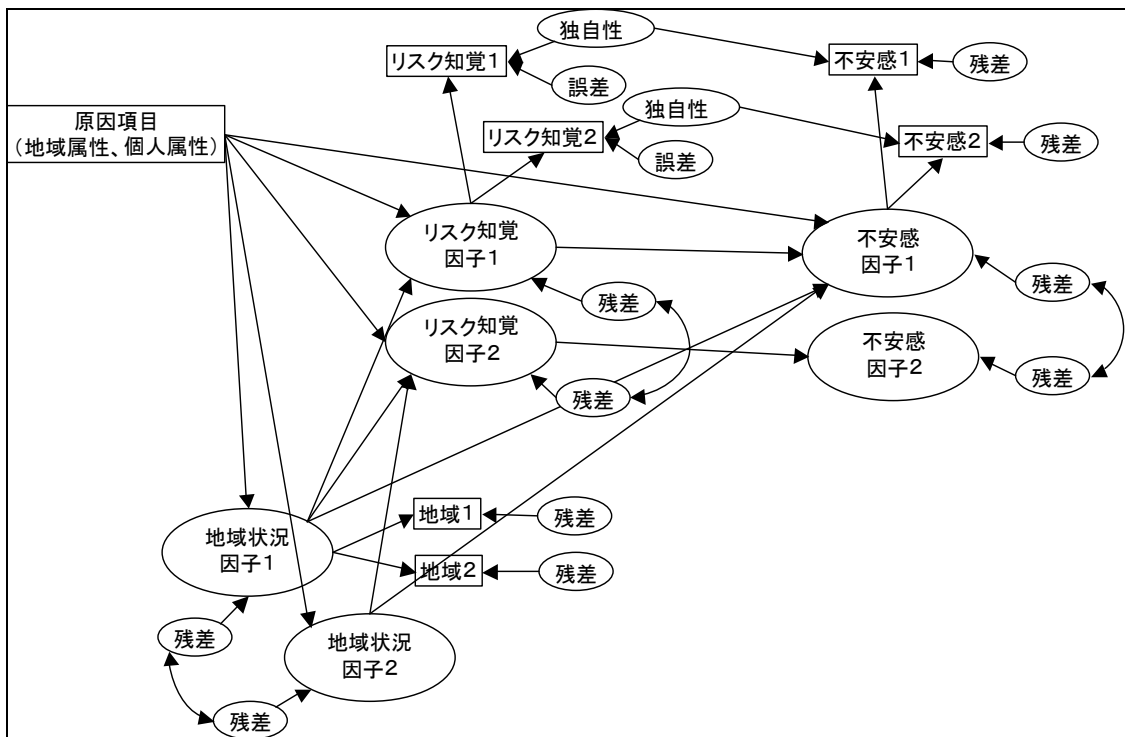
問1では、過去1年間の犯罪被害経験を聞いている。「被害があった」という回答者の割合は少ないが、その影響は大きいこと、さらに被害種別によって影響が異なることなどが予想され、SEMにおける因果モデルに取り込みにくい変数である。そこで、まず、第2節にて、被害経験の影響について概括し、対処方法を検討する。

(3) 因果モデルの基本構造

ここでの因果モデルの構造を考えるにあたり、考慮すべきポイントは次の通り。

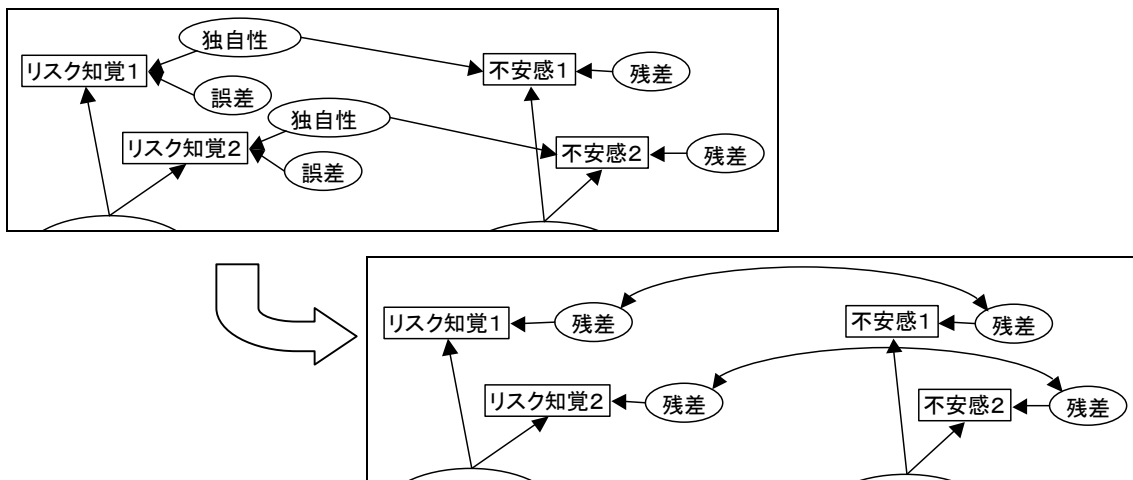
- ・項目数が多いので、個々の観測変数の背後に、より少数個の潜在変数（因子）をおくモデルを考えた方がよさそうである。
- ・リスク知覚と不安感とは、項目が対応している。よって、共通の因子配置を想定しうることが望ましい。その場合、リスク知覚から不安感への影響は、対応する因子間の因果的影響と、対応する観測変数間の独自性成分の間の因果的影響として表現できそうである。
- ・地域状況に関しては、リスク知覚・不安感との間に項目の対応関係はないので、どんな因果関係にあるかは探索的にパスを設ける。

以上の議論に基づき、因果モデルの基本構造を描くと、下図のようなものとなる。



図Ⅲ-3-1 因果モデルの基本構造

ただし、実際の分析においては、リスク知覚の観測変数における「誤差」と「独自性」は分離できないので、「リスク知覚の独自性が及ぼす影響」を表しているという含意のもと、対応する観測変数の残差相関としてモデル表現を行う。



図Ⅲ-3-2 実際の分析における因果モデルの表現方法

(4) 統計的因果分析の手順

モデル・ビルディングの手順としては、まず、地域状況、リスク知覚、不安感の因子構造を決定する。とくに、リスク知覚と不安感については、因子の配置を共通のものとしてできるかを検討する必要がある。これらの点について、第3節にて、探索的因子分析および検証的因子分析を用いて検討する。また、前年度の調査報告書（第Ⅲ部第3章）によれば、性別によって不安感やリスク知覚の因子構造が異なる可能性が示唆されている。性別によらず共通の構造としうるかも、第3節にて検討する。

第4節では、前節で得られた因子分析の結果を図Ⅲ-3-1の因果モデルの中に組み込み、地域状況の因子からリスク知覚・不安感へのパスと、地域特性・個人属性などの原因項目からのパスを探索して、最終的な因果モデルを得る。さらに得られたモデルをもとに因果関係を解釈・考察する。

最後に第5節として、この章のまとめの考察を加える。

2. 犯罪被害経験の影響に関する検討

(1) 検討の方法

問1では、被害種別ごとに過去1年間の犯罪被害経験を聞いている。被害種別は問5、問6と対応しているが、テロ・銃器など、いくつかの被害種別が割愛され、全15項目（+その他）となっている。「いずれの被害にもあっていない」回答者（以下、「無被害者」と呼ぶ）は1,365名（76.7%）である。

ここでは、不安感（問5）、リスク知覚（問6）、地域状況など（問36～38）の回答が、各種犯罪被害の経験者と無被害者でどの程度異なるかを検討する。

具体的には、これら設問の各項目について、それぞれの犯罪被害の「被害経験あり」と

した回答者について、以下の値を算出した。

- ①平均値： 被害経験者の平均値を求める
- ②差： 無被害者の平均値との差を求める
- ③効果量： 上記「差」を無被害者の標準偏差で除す
得られた結果を表Ⅲ－３－１～表Ⅲ－３－３として示す。

(2) 結果と考察

表Ⅲ-3-1 被害経験が不安感に与える影響

被害経験 種別	統計量	N	不安感Q5																				
			㉑暴力的な犯罪	㉒自宅にどろぼう	㉓ひったくり	㉔自転車盗難	㉕自動車バイク盗難	㉖すり	㉗自動車内の金品盗難	㉘痴漢	㉙悪質商法などの詐欺	㉚自宅や車に落書き	㉛無断侵入	㉜子どもが不審者から声	㉝子どもが連れ去られ	㉞子どもが性的被害	㉟つきまといのぞき	㊱ネット犯罪	㊲凶悪犯罪抜きこまれ	㊳アロまきこまれ	㊴銃器犯罪	㊵飲酒運転・ひき逃げ	
無被害者	平均 標準偏差	1365	3.29 .66	3.04 .71	3.27 .69	3.31 .75	3.45 .66	3.39 .72	3.38 .64	3.59 .65	3.36 .74	3.35 .71	3.23 .75	3.12 .97	3.23 .96	3.25 .93	3.35 .74	3.39 .77	3.33 .71	3.57 .65	3.55 .64	2.85 .85	
1) 暴力的な 犯罪	平均 差	14	2.57 -.72	3.21 .18	3.46 .19	3.29 -.03	3.29 -.16	3.43 .04	3.57 .20	3.34 -.09	3.26 .06	3.33 .06	3.43 -.23	3.21 -.33	3.00 -.07	2.79 -.33	3.15 -.06	3.31 -.32	3.08 .03	3.07 -.14	3.36 .03	3.43 .09	3.64 .29
	効果量		<u>-1.09</u>	.25	.28	-.04	-.25	.05	.27	-.14	.09	.20	-.31	-.34	-.08	-.06	-.37	-.41	.04	-.22	.14	.35	.35
2) 自宅にど ろぼう	平均 差	52	3.10 -.19	2.63 -.40	3.33 .06	3.19 -.12	3.29 -.16	3.33 -.06	3.33 -.05	3.56 -.05	3.57 .20	3.38 .03	3.12 -.11	3.17 .06	3.31 .08	3.38 .13	3.44 .09	3.42 .04	3.42 .09	3.42 .09	3.65 .08	3.63 .08	2.96 .11
	効果量		-.29	<u>-.57</u>	-.09	-.16	-.24	-.09	-.07	-.03	.28	.04	-.15	.06	.08	.14	.12	.05	.13	.13	.13	.13	.13
3) ひったく り	平均 差	14	2.93 -.36	2.79 -.25	2.79 -.48	2.86 -.46	3.00 -.45	3.21 -.18	3.00 -.38	3.36 -.23	3.29 -.08	3.14 -.21	3.14 -.09	3.08 -.03	3.33 .11	3.25 .00	3.14 -.21	3.50 .11	3.07 -.26	3.43 -.14	3.29 -.27	2.71 -.14	
	効果量		<u>-.55</u>	<u>-.35</u>	<u>-.70</u>	<u>-.61</u>	<u>-.68</u>	<u>-.27</u>	<u>-.52</u>	<u>-.36</u>	<u>-.11</u>	<u>-.30</u>	<u>-.12</u>	<u>-.03</u>	.11	.00	-.29	.15	-.37	-.22	-.41	-.16	
4) 自転車 盗難	平均 差	145	3.16 -.12	2.94 -.09	3.18 -.09	2.47 -.84	3.16 -.29	3.34 -.06	3.26 -.11	3.46 -.12	3.35 -.02	3.33 -.03	3.06 -.17	3.33 -.11	3.06 -.07	3.01 -.11	3.16 -.10	3.14 -.16	3.25 .04	3.22 -.16	3.37 .04	3.65 .08	3.58 .03
	効果量		-.19	-.13	-.13	<u>-1.13</u>	-.44	-.09	-.15	-.19	-.02	-.04	-.22	-.11	-.07	-.12	-.13	-.21	.05	.13	.05	.05	.00
5) 自動車 バイク盗 難	平均 差	30	3.25 -.04	2.93 -.10	3.18 -.09	2.76 -.55	2.64 -.81	3.29 -.11	3.11 -.27	3.61 .02	3.48 .12	3.21 -.16	3.07 -.38	2.74 -.30	2.92 -.30	2.74 -.21	3.04 -.21	3.24 -.02	3.37 -.05	3.29 -.43	3.43 -.12	2.76 -.09	
	効果量		-.06	-.15	-.13	<u>-.74</u>	<u>-1.22</u>	-.16	-.37	.03	.16	-.20	-.22	-.39	-.32	-.23	-.15	-.02	-.06	-.22	-.19	-.11	
6) すり	平均 差	11	3.10 -.19	2.80 -.24	3.00 -.27	2.80 -.51	2.70 -.75	2.60 -.79	3.10 -.28	3.30 -.39	2.70 -.66	2.90 -.45	2.70 -.89	3.00 -.64	3.00 -.71	3.00 -.12	3.00 -.23	2.90 -.35	3.00 -.15	3.00 -.39	3.20 -.13	3.50 -.07	3.30 -.25
	効果量		-.29	-.33	-.39	<u>-.68</u>	<u>-1.13</u>	<u>-1.20</u>	-.38	-.45	<u>-.89</u>	<u>-.64</u>	<u>-.71</u>	-.12	-.24	-.38	-.21	<u>-.50</u>	-.18	-.11	-.39	-.18	
7) 自動車 内の金 品盗難	平均 差	46	3.28 -.01	2.93 -.10	3.46 .19	3.09 -.22	3.23 -.22	3.41 .02	2.72 -.66	3.57 -.02	3.54 .18	3.17 -.18	3.18 -.05	3.05 -.07	3.18 -.04	3.30 .04	3.38 .09	3.48 .08	3.41 .08	3.76 .19	3.70 .14	2.87 .02	
	効果量		-.01	-.14	.27	-.30	-.33	.03	<u>-.91</u>	-.04	.24	-.25	-.07	-.07	-.05	.02	.03	.12	.11	.29	.23	.02	
8) 痴漢	平均 差	33	2.84 -.45	2.64 -.40	2.75 -.52	2.90 -.41	2.90 -.54	2.91 -.49	3.16 -.22	2.42 -1.17	2.94 -.43	3.15 -.20	2.75 -.48	2.68 -.44	2.94 -.29	2.75 -.50	2.53 -.82	2.59 -.79	2.97 -.36	3.44 -.13	3.44 -.11	2.48 -.37	
	効果量		<u>-.68</u>	<u>-.56</u>	<u>-.75</u>	<u>-.55</u>	<u>-.82</u>	<u>-.74</u>	-.30	<u>-1.82</u>	<u>-.57</u>	<u>-.29</u>	<u>-.64</u>	<u>-.45</u>	-.30	<u>-.54</u>	<u>-1.11</u>	<u>-1.03</u>	<u>-.51</u>	-.20	-.18	-.43	
9) 悪質商 法などの 詐欺	平均 差	34	3.22 -.07	2.71 -.33	3.06 -.21	3.06 -.25	3.09 -.36	3.03 -.36	3.00 -.38	3.16 -.43	2.35 -1.01	3.12 -.23	2.97 -.26	2.76 -.36	2.88 -.35	2.88 -.37	2.97 -.38	3.06 -.33	3.21 -.12	3.61 .04	3.52 -.04	2.85 .00	
	効果量		-.11	-.47	-.30	-.34	<u>-.54</u>	<u>-.55</u>	<u>-.52</u>	<u>-.67</u>	<u>-1.36</u>	-.33	-.35	-.37	-.36	-.40	<u>-.52</u>	<u>-.42</u>	-.17	.06	-.06	.00	
10) 自宅や 車に落 書き	平均 差	72	3.01 -.27	2.85 -.19	3.16 -.11	3.00 -.31	2.84 -.61	3.28 -.11	2.81 -.56	3.29 -.30	3.18 -.19	2.39 -.96	2.77 -.46	2.77 -.58	2.54 -.48	2.75 -.35	2.90 -.19	3.16 -.46	2.93 -.46	3.03 -.30	3.44 -.13	3.43 -.12	2.61 -.24
	効果量		-.42	-.27	-.16	-.42	<u>-.92</u>	-.17	<u>-.78</u>	-.47	-.25	<u>-1.35</u>	<u>-.61</u>	<u>-.60</u>	<u>-.50</u>	-.38	-.26	<u>-.60</u>	-.43	-.20	-.19	-.28	
11) 無断侵 入	平均 差	50	3.07 -.22	2.63 -.40	3.24 -.02	3.11 -.20	3.20 -.25	3.36 -.03	3.11 -.27	3.44 -.14	3.09 -.28	2.87 -.49	2.20 -1.03	2.77 -.35	2.91 -.32	2.89 -.36	3.20 -.16	3.02 -.37	3.13 -.20	3.49 -.08	3.51 -.04	2.53 -.32	
	効果量		-.34	<u>-.57</u>	-.03	-.27	-.38	-.04	-.37	-.22	-.38	<u>-.68</u>	<u>-1.37</u>	-.36	-.33	-.39	-.21	-.47	-.28	-.13	-.06	-.38	
12) 子ども が不審 者から 声	平均 差	31	3.17 -.12	3.06 .03	3.31 .04	2.94 -.38	3.21 -.24	3.40 .01	3.52 .14	3.28 -.41	3.37 .00	3.20 -.15	3.23 .00	2.20 -.92	2.62 -.61	2.53 -.72	3.14 -.22	3.13 -.25	3.21 -.12	3.53 -.04	3.60 .05	2.55 -.30	
	効果量		-.19	.04	.06	<u>-.50</u>	-.36	.01	.20	-.39	.00	-.22	-.01	<u>-.95</u>	<u>-.63</u>	<u>-.77</u>	-.29	-.33	-.17	-.06	.08	-.36	
13) つきま といの ぞき	平均 差	19	2.89 -.40	2.53 -.51	3.11 -.16	2.89 -.42	3.12 -.33	3.11 -.28	3.28 -.10	3.22 -.37	3.44 .08	3.44 .09	3.00 -.23	2.53 -.59	2.82 -.40	2.88 -.37	2.32 -1.04	3.22 -.17	3.06 -.28	3.50 -.07	3.39 -.16	2.37 -.48	
	効果量		<u>-.61</u>	<u>-.72</u>	-.23	<u>-.56</u>	-.50	-.43	-.14	<u>-.57</u>	.11	.13	-.31	<u>-.61</u>	-.42	-.40	<u>-1.41</u>	-.21	-.39	-.11	-.25	<u>-.57</u>	
14) ネット 犯罪	平均 差	19	3.16 -.13	2.84 -.19	3.00 -.27	3.00 -.31	2.74 -.71	3.16 -.23	3.05 -.32	3.37 -.22	2.53 -.84	2.79 -.57	2.63 -.60	2.58 -.54	2.84 -.38	2.63 -.62	2.74 -.62	2.05 -1.33	3.05 -.28	3.32 -.25	3.21 -.34	2.37 -.48	
	効果量		-.20	-.27	-.39	<u>-1.08</u>	-.36	-.45	-.34	<u>-1.13</u>	<u>-.80</u>	<u>-.80</u>	<u>-.56</u>	-.40	-.67	<u>-.84</u>	<u>-1.73</u>	-.39	-.39	-.53	-.57		

表中の数値の説明：

上段：「平均」＝(被害経験者の平均値)

中段：「差」＝(被害経験者の平均値)-(無被害者の平均値)

下段：「効果量」＝{(被害経験者の平均値)-(無被害者の平均値)} / (無被害者の標準偏差)

* 効果量の絶対値>0.5の場合、下線を設けている

表Ⅲ-3-2 被害経験がリスク知覚に与える影響

被害経験種別	統計量	N	リスク知覚Q6																			
			1) 暴力的な犯罪	2) 自宅にどろぼう	3) ひったくり	4) 自転車盗難	5) 自動車バイク盗難	6) すり	7) 自動車内の金品盗難	8) 痴漢	9) 悪質商法などの詐欺	10) 自宅や車に落書き	11) 無断侵入	12) 子どもが不審者から声	13) つきまといのぞき	14) ネット犯罪	15) 凶悪犯罪まきこまれ	16) テロまきこまれ	17) 銃器犯罪	18) 飲酒運転・ひき逃げ		
無被害者	平均 標準偏差	1365	2.99 .70	2.66 .75	2.84 .76	2.89 .87	3.03 .78	2.97 .76	3.02 .82	3.21 .74	3.07 .81	2.97 .80	2.85 .83	2.97 .95	3.09 .90	3.11 .87	3.01 .79	3.13 .84	3.08 .75	3.31 .72	3.27 .71	2.60 .85
1) 暴力的な犯罪	平均 差 効果量	14	2.50 -.49 -.70	2.71 .05 -.07	2.71 -.13 -.12	2.79 -.10 -.12	3.07 .04 -.05	3.00 .03 -.04	3.07 .05 -.01	3.21 .01 -.08	3.00 -.07 -.11	2.86 .00 -.14	2.86 .00 -.11	2.79 -.18 -.19	3.14 .06 -.06	3.29 .18 -.20	2.77 -.24 -.31	3.14 .02 -.02	3.21 .13 -.18	3.43 .12 -.16	3.36 .09 -.12	2.64 .04 -.05
2) 自宅にどろぼう	平均 差 効果量	52	2.88 -.11 -.16	2.44 -.22 -.29	2.80 -.04 -.05	2.84 -.05 -.05	2.96 -.07 -.09	2.84 -.13 -.17	2.98 -.04 -.05	3.16 .01 -.02	3.08 -.07 -.08	2.90 -.24 -.29	2.62 .17 -.18	3.14 .13 -.15	3.22 .05 -.06	3.16 .10 -.13	3.12 .11 -.14	3.24 .09 -.12	3.17 .09 -.12	3.47 .16 -.22	3.29 .01 -.02	2.50 -.10 -.12
3) ひったくり	平均 差 効果量	14	2.57 -.42 -.60	2.29 -.38 -.50	2.36 -.48 -.64	2.43 -.46 -.53	2.57 -.46 -.59	2.50 -.40 -.53	2.77 -.52 -.64	3.00 -.44 -.59	2.86 -.21 -.26	2.43 -.54 -.68	2.36 -.50 -.60	3.08 .11 -.11	3.23 .14 -.16	3.23 .12 -.16	2.86 -.34 -.41	2.79 -.44 -.59	2.64 -.17 -.24	3.14 -.34 -.48	2.93 -.23 -.48	2.36 -.24 -.28
4) 自転車盗難	平均 差 効果量	145	2.93 -.06 -.09	2.56 -.10 -.14	2.69 -.15 -.20	2.18 -.71 -.82	2.83 -.20 -.26	2.85 -.09 -.16	3.16 -.04 -.11	3.00 -.05 -.06	2.99 -.07 -.08	2.97 .01 -.15	2.73 -.06 -.15	2.91 -.06 -.06	3.04 -.05 -.13	3.02 .01 -.01	2.99 -.14 -.17	3.11 .03 -.03	3.39 .07 -.10	3.28 .01 -.01	2.52 -.08 -.09	
5) 自動車バイク盗難	平均 差 効果量	30	3.07 .08 -.11	2.60 -.06 -.09	2.76 -.08 -.11	2.28 -.61 -.71	2.34 -.69 -.88	2.89 -.08 -.07	2.96 -.06 -.28	3.00 -.21 -.28	2.83 -.23 -.29	2.86 -.11 -.23	2.62 -.23 -.24	2.74 -.23 -.22	2.89 -.20 -.08	3.04 .13 -.16	3.14 .05 -.06	3.07 .20 -.04	3.29 -.03 -.27	3.29 -.04 -.03	2.59 -.01 -.01	
6) すり	平均 差 効果量	11	2.91 -.09 -.12	2.55 -.12 -.16	2.55 -.30 -.39	2.64 -.25 -.29	2.73 -.31 -.39	2.64 -.34 -.44	3.00 -.02 -.03	3.09 -.11 -.15	2.73 -.34 -.42	2.80 -.17 -.21	2.55 -.31 -.37	3.00 .03 -.03	3.27 .19 -.21	2.91 -.20 -.23	2.73 -.29 -.36	3.00 -.13 -.15	2.82 -.26 -.35	3.18 -.13 -.18	3.09 -.18 -.25	2.73 .13 -.15
7) 自動車内の金品盗難	平均 差 効果量	46	3.07 .07 -.10	2.70 .03 -.04	2.96 .11 -.15	2.69 -.20 -.23	2.87 -.16 -.21	2.98 .01 -.01	3.24 -.35 -.43	3.22 .15 -.05	2.80 -.17 -.21	2.80 -.16 -.19	3.02 -.11 -.11	2.86 .06 -.07	3.07 -.04 -.05	3.04 .03 -.04	3.20 .07 -.09	3.15 .07 -.09	3.51 .20 -.28	3.36 .09 -.13	2.57 -.03 -.04	
8) 痴漢	平均 差 効果量	33	2.63 -.37 -.53	2.27 -.39 -.52	2.45 -.39 -.51	2.53 -.36 -.41	2.66 -.38 -.48	2.50 -.47 -.62	2.84 -.18 -.22	2.19 -1.01 -1.36	2.50 -.57 -.70	2.88 -.10 -.12	2.56 -.29 -.35	2.59 -.38 -.39	2.75 -.34 -.38	2.66 -.45 -.52	2.41 -.61 -.77	2.53 -.59 -.71	2.78 -.30 -.40	3.16 -.16 -.22	3.09 -.18 -.25	2.18 -.42 -.49
9) 悪質商法などの詐欺	平均 差 効果量	34	2.70 -.30 -.42	2.38 -.28 -.37	2.48 -.36 -.47	2.36 -.53 -.61	2.84 -.19 -.24	2.67 -.31 -.40	2.85 -.18 -.49	2.84 -.36 -.49	2.24 -.83 -1.03	2.94 -.03 -.30	2.61 -.25 -.30	2.73 -.24 -.25	2.76 -.33 -.37	2.79 -.32 -.44	2.67 -.35 -.44	2.76 -.37 -.44	2.91 -.17 -.23	3.36 .05 -.07	3.21 -.06 -.08	2.58 -.02 -.03
10) 自宅や車に落書き	平均 差 効果量	72	2.79 -.21 -.30	2.54 -.13 -.17	2.59 -.25 -.33	2.62 -.27 -.31	2.46 -.57 -.73	2.72 -.25 -.33	2.55 -.47 -.58	2.93 -.28 -.38	2.72 -.34 -.42	2.24 -.73 -.91	2.40 -.46 -.55	2.50 -.47 -.49	2.63 -.46 -.51	2.75 -.36 -.41	2.77 -.24 -.31	2.72 -.40 -.48	2.91 -.17 -.22	3.17 -.14 -.19	3.06 -.21 -.30	2.21 -.38 -.45
11) 無断侵入	平均 差 効果量	50	2.86 -.13 -.19	2.38 -.29 -.38	2.60 -.25 -.32	2.77 -.12 -.14	2.80 -.23 -.29	2.85 -.12 -.16	2.84 -.09 -.12	3.12 -.30 -.36	2.77 -.30 -.36	2.72 -.25 -.32	1.96 -.90 -1.08	2.67 -.30 -.31	2.83 -.26 -.29	2.78 -.33 -.38	2.85 -.16 -.20	2.85 -.28 -.33	2.96 -.12 -.17	3.29 -.02 -.03	3.23 -.04 -.06	2.25 -.35 -.41
12) 子どもが不審者から声	平均 差 効果量	31	2.77 -.23 -.32	2.60 -.06 -.09	2.71 -.13 -.17	2.39 -.50 -.58	2.65 -.39 -.49	2.93 -.04 -.05	2.83 -.12 -.15	2.97 -.83 -.51	2.97 -.10 -.12	2.90 -.07 -.09	2.74 -.11 -.14	2.16 -.81 -.85	2.37 -.72 -.80	2.53 -.58 -.66	2.77 -.16 -.30	2.97 -.16 -.19	3.07 -.01 -.02	3.30 -.30 -.02	3.20 -.07 -.10	2.42 -.18 -.21
13) つきまといのぞき	平均 差 効果量	19	2.50 -.49 -.70	2.26 -.40 -.53	2.58 -.26 -.35	2.37 -.52 -.60	2.68 -.35 -.44	2.61 -.36 -.48	2.94 -.08 -.10	2.78 -.43 -.58	2.79 -.28 -.34	2.94 -.03 -.03	2.53 -.33 -.39	2.74 -.23 -.24	2.74 -.35 -.39	2.72 -.39 -.45	2.26 -.75 -.95	2.94 -.18 -.22	3.00 -.08 -.11	3.22 -.09 -.13	3.11 -.16 -.22	2.16 -.44 -.52
14) ネット犯罪	平均 差 効果量	19	2.89 -.10 -.14	2.53 -.14 -.18	2.47 -.37 -.48	2.58 -.31 -.36	2.47 -.56 -.71	2.79 -.18 -.24	2.63 -.39 -.48	3.11 -.10 -.14	2.16 -.91 -1.12	2.53 -.44 -.56	2.42 -.43 -.52	2.68 -.29 -.30	2.84 -.24 -.27	2.68 -.43 -.49	2.58 -.43 -.55	2.00 -1.13 -1.35	3.00 -.08 -.11	3.37 .06 -.08	3.11 -.17 -.23	2.16 -.44 -.52

表中の数値の説明：

上段：「平均」＝(被害経験者の平均値)

中段：「差」＝(被害経験者の平均値)-(無被害者の平均値)

下段：「効果量」＝{(被害経験者の平均値)-(無被害者の平均値)} / (無被害者の標準偏差)

* 効果量の絶対値>0.5 の場合、下線を設けている

表Ⅲ-3-3 被害経験が地域状況の認知などに与える影響

被害経験種別	統計量	N	警察の地域防犯Q36、Q37										地域評価Q38									
			Q36積極的に取り組んでいる	a)ハローロール	b)家庭に訪問	c)交番への常時配置	d)空き家が多い	e)街灯貧弱、夜暗い	f)樹木の管理が悪い	g)ゴミ吸い殻	h)スプレーで落書き	i)風俗産業など有音環境	j)非行少年たまり場	k)未成年がたばこ	l)路上に二輪車乗り捨て	m)近所づきあいのない人	n)トラブルを起こす人	o)屋、学校をさぼる中高生	p)夜、たむろする若者	q)暴走族と関わる若者	r)暴力団とかかわる人	
無被害者	平均 標準偏差	1365	2.57 .83	2.71 .84	3.39 .74	2.56 .86	3.17 .66	2.34 .83	2.79 .76	2.62 .79	3.40 .64	3.61 .58	3.26 .69	3.17 .73	3.05 .80	2.65 .77	3.17 .67	3.40 .62	3.16 .77	3.44 .62	3.51 .60	
1) 暴力的な犯罪	平均 差 効果量	14	2.43 -14 -17	2.50 -21 -25	3.21 -17 -23	2.64 .08 -10	3.07 -10 -16	1.79 -55 -66	2.29 -51 -42	2.29 -33 -42	3.64 .24 -38	3.71 .11 -19	2.93 -33 -49	2.79 -39 -49	3.08 .03 -53	2.36 -29 -38	3.00 -17 -26	3.21 -19 -30	2.86 -30 -39	2.93 -51 -82	3.07 -44 -73	
2) 自宅にどろぼう	平均 差 効果量	52	2.48 -09 -11	2.52 -19 -23	3.37 -02 -03	2.64 .08 -10	3.23 .06 -09	2.21 -13 -15	2.77 -02 -03	2.65 .04 -05	3.25 -15 -23	3.46 -14 -25	3.13 -13 -19	3.08 -10 -13	2.85 -20 -25	2.71 .06 -08	3.04 -13 -21	3.27 -13 -21	3.00 -16 -20	3.29 -15 -24	3.44 -06 -11	
3) ひったくり	平均 差 効果量	14	2.29 -29 -34	2.43 -28 -34	3.14 -24 -33	2.77 .21 -25	3.29 .11 -17	2.00 -34 -41	2.57 -22 -29	2.57 -05 -06	3.07 -33 -51	3.36 -25 -43	3.07 -19 -28	3.14 -03 -04	2.86 -19 -24	2.79 .14 -17	3.29 .11 -17	3.57 .17 -28	3.21 .06 -07	3.21 -32 -10	3.50 .06 -11	
4) 自転車盗難	平均 差 効果量	145	2.59 .01 -02	2.69 -09 -03	3.48 .10 -13	2.56 .00 -08	3.12 -05 -08	2.34 .00 -04	2.76 -03 -04	2.41 -21 -26	3.20 -20 -32	3.44 -16 -28	3.09 -17 -25	2.90 -33 -38	2.72 -33 -41	2.48 -17 -22	3.06 -11 -16	3.26 -14 -23	2.99 -16 -21	3.29 -15 -24	3.40 -11 -18	
5) 自動車バイク盗難	平均 差 効果量	30	2.76 .19 -22	2.93 .22 -26	3.53 .15 -20	2.85 .29 -34	3.34 .17 -26	2.17 -17 -21	2.80 .01 -01	2.23 -38 -48	3.23 -17 -26	3.53 -07 -12	2.87 -40 -58	2.57 -61 -83	2.62 -43 -53	2.50 -15 -19	2.87 -31 -46	3.07 -33 -54	2.87 -29 -38	3.13 -30 -49	3.37 -14 -23	
6) すり	平均 差 効果量	11	2.36 -21 -25	2.82 .11 -12	3.55 .16 -21	2.73 .17 -20	2.64 -54 -81	1.91 -43 -52	2.30 -49 -65	2.45 -16 -20	3.45 .06 -09	3.73 .12 -21	3.36 .10 -15	3.09 -08 -11	3.00 -05 -06	2.45 -20 -25	3.00 -17 -26	3.18 -22 -36	3.18 .02 -03	3.09 -34 -56	3.27 -23 -39	
7) 自動車内の金品盗難	平均 差 効果量	46	2.76 .18 -22	2.78 .07 -08	3.54 .16 -21	2.77 .21 -25	3.22 .05 -07	2.35 .01 -01	2.78 -01 -03	2.59 -09 -11	3.30 -09 -18	3.50 -11 -18	3.20 -07 -10	3.00 -17 -24	2.80 .02 -30	2.67 .00 -03	3.17 -04 -07	3.36 -16 -20	3.00 -09 -14	3.35 -03 -05	3.48 -03 -05	
8) 痴漢	平均 差 効果量	33	2.67 .09 -11	2.76 .04 -05	3.55 .16 -21	2.88 .32 -37	3.00 -17 -26	2.06 -28 -33	2.61 -19 -25	2.33 -28 -36	3.22 -18 -28	3.48 -12 -21	3.00 -26 -38	2.79 -39 -53	2.82 -41 -53	2.24 -32 -48	2.85 -34 -55	3.06 -43 -60	2.73 -43 -56	3.18 -25 -41	3.39 -11 -19	
9) 悪質商法などの詐欺	平均 差 効果量	34	2.41 -16 -19	2.53 -18 -22	3.41 .02 -03	2.61 .05 -06	3.21 .03 -16	2.21 -13 -16	2.88 .09 -12	2.53 -09 -21	3.26 -13 -21	3.50 .00 -18	3.26 .00 -00	3.18 -14 -17	2.91 .06 -07	2.71 .06 -09	2.91 -08 -12	3.32 -01 -12	3.15 -01 -18	3.32 -07 -11	3.44 -07 -11	
10) 自宅や車に落書き	平均 差 効果量	72	2.50 -07 -09	2.76 .05 -06	3.48 .09 -12	2.61 .06 -07	3.10 -08 -12	2.17 -17 -21	2.57 -22 -29	2.42 -20 -25	3.18 -22 -34	3.39 -22 -37	2.97 -29 -42	2.81 -37 -50	2.76 -28 -35	2.33 -32 -41	2.74 -44 -65	3.18 -22 -36	2.83 -32 -42	3.13 -31 -50	3.24 -27 -45	
11) 無断侵入	平均 差 効果量	50	2.82 .25 -30	2.67 -04 -05	3.50 .11 -15	2.68 .12 -14	2.96 -21 -32	2.04 -30 -36	2.63 -16 -21	2.32 -30 -37	3.34 -06 -09	3.42 -19 -32	3.02 -24 -35	2.98 -19 -27	2.70 -35 -43	2.36 -29 -38	2.60 -27 -42	3.14 -26 -42	2.96 -20 -26	3.26 -18 -28	3.38 -13 -21	
12) 子どもが不審者から声	平均 差 効果量	31	2.84 .27 -03	2.65 -07 -08	3.42 .03 -04	2.70 .14 -16	3.06 -11 -17	2.23 -11 -14	2.58 -25 -28	2.33 -38 -48	3.03 -37 -57	3.29 -32 -54	2.90 -36 -53	2.90 -27 -37	2.77 -42 -55	2.23 -40 -59	2.77 -40 -59	3.03 -30 -48	2.58 -58 -75	2.97 -47 -76	3.35 -15 -25	
13) つきまといいのぞき	平均 差 効果量	19	2.26 -31 -37	2.21 -50 -60	3.32 -07 -10	2.75 .19 -22	2.95 -23 -34	2.21 -13 -15	2.68 -13 -14	2.37 -25 -31	3.32 -08 -13	3.11 -50 -86	2.95 -31 -46	2.79 -39 -57	2.59 -46 -60	2.42 -23 -30	2.89 -28 -48	3.11 -30 -48	2.63 -53 -68	2.89 -54 -88	3.21 -30 -50	
14) ネット犯罪	平均 差 効果量	19	2.63 .06 -07	2.68 -03 -03	3.37 -02 -03	2.89 .34 -39	2.89 -28 -42	2.00 -34 -41	2.16 -63 -84	2.32 -30 -38	3.16 -24 -38	3.37 -24 -41	2.89 -37 -54	2.74 -44 -60	2.79 -26 -32	2.42 -23 -30	2.89 -28 -41	2.89 -51 -82	2.63 -53 -68	2.79 -65 -105	2.89 -61 -102	

表中の数値の説明：

上段：「平均」＝(被害経験者の平均値)

中段：「差」＝(被害経験者の平均値)-(無被害者の平均値)

下段：「効果量」＝{(被害経験者の平均値)-(無被害者の平均値)} / (無被害者の標準偏差)

* 効果量の絶対値>0.5 の場合、下線を設けている

被害経験者の人数の多寡により、必ずしも統計的有意性とは対応しないが、表中の「効果量」の大小で影響の程度を判断するのが妥当と思われる。

表Ⅲ－３－１、表Ⅲ－３－２をみると、効果量の絶対値が1を超える、つまり標準偏差より大きな差が生じている項目が散見されるのは驚くべきことである。全体的には、リスク知覚より不安感への影響の方がやや大きいようである。また、経験したのと同じ被害種別の不安感・リスク知覚が増大するだけでなく、他の被害種別の不安感・リスク知覚にも影響を与えている場合もある。特に、「ひったくり」「痴漢」などの身体接触を伴う犯罪被害の経験は、他の被害種別の不安感・リスク知覚を増大させるようである。

表3－2－3の地域状況の認識への影響に関しては、さすがに効果量の絶対値が1を超えることはほとんどない。しかし絶対値が0.5を超える項目は散見される。犯罪被害とは異なる概念の設問であることを考えると、これは相当に大きい影響であるといえる。また、どんな被害の経験がどんな地域状況の認知に影響するかという対応関係も考察できそうであるが、ここでは深くはふれないこととする。

(3) 統計的因果分析における対処方法

本節の検討により分かったことと、そこから導かれるSEMにおける扱い方を整理してみると、下記のように、なかなか難しい状況である。

- ①各被害種別ごとの被害経験者の全回答者に対する割合は少ない
→因果モデルに取り込むほどのことはない
- ②被害経験の影響は大きい
→因果モデルに取り入れるべきである
- ③被害種別によって影響が異なる
→因果モデルに組み込みにくい(モデルの複雑化をまねく、一括して「何らかの被害経験の有無」といった扱いがしにくい)

そこで、次節以降のSEMの分析においては、問題回避のため、「無被害者」すなわち、過去1年間にいずれの被害も経験していない回答者(1,365名、全体の76.7%)を分析対象データとして用いることとする。

3. 不安感・リスク知覚・地域状況の認知の因子分析

本節では、図Ⅲ－3－1の因果モデルに組み込むべき潜在変数の配置を決定するため、不安感（問5）、リスク知覚（問6）、地域状況など（問36～38）について因子分析を実施する。また、性別による構造の違いについても検討する。

(1) 不安感・リスク認知の因子分析（無被害者全員の分析）

本項では、不安感（問5）、リスク知覚（問6）のそれぞれについて、まず、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施し、その結果を参考としてSEMによる検証的因子分析（最尤法）を実施する。

分析対象データは無被害者（問1でいずれの被害経験もない回答者）1,356名である。欠測値は多くない（多い項目でも数%程度）ので、欠測値を無視して共分散行列を求め（いわゆるペアワイズ除去）、これを分析対象行列とする。その際、欠測値を考慮してサンプルサイズを1,250として扱うこととする。

①不安感とリスク知覚で極力共通の因子配置となること、②解釈可能であること、③適合度が良好であること、などを考慮してモデリング作業を行い、表Ⅲ－3－4に示す検証的因子分析モデルを得た。表中には、得られたモデルの因子負荷量、因子相関、適合度などをまとめて示してある。

幸いなことに、不安感とリスク知覚で全く同一の因子配置とすることができ、いわゆる「配置不変性」が成立した。また、因子負荷量や因子相関の推定値もかなり近い値となっている。適合度も良好である。

得られた因子は、次のように解釈することとした。

- F1：性的・つきまとい（性的犯罪・つきまとい等のストーカー的犯罪）
- F2：子どもが被害（子どもを狙った犯罪）
- F3：家・車を侵害（自宅や車への侵入、盗難、落書きなど）
- F4：車両が被害（自動車、オートバイ、自転車の盗難、落書き、車上狙い）
- F5：泥棒被害（すり、ひったくり、空き巣など）
- F6：凶悪犯罪（テロ、銃器犯罪、殺人など凶悪犯罪）
- F7：身体被害（暴力、交通事故、凶悪犯罪など、身体に被害を受ける犯罪）
- F8：詐欺・ネット犯罪（詐欺犯罪、インターネットを利用した犯罪）

表Ⅲ-3-4 不安感とリスク知覚の検証的因子分析(無被害者全員)

	不安感(問5)の検証的因子分析									リスク知覚(問6)の検証的因子分析								
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	共通性	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	共通性
因子負荷量(標準化パス係数)	h)痴漢	.704							.495	.831								.690
	o)つきまといのぞき	.493	.153	.300					.643	.425	.133	.402						.702
	n)子どもが性的被害	.158	.803						.808	.152	.820							.839
	l)子どもが不審者から声		.936						.877		.933							.871
	m)子どもが連れ去られる		.949						.901		.964							.930
	k)無断侵入			.825					.681		.839							.704
	b)自宅にどろぼう			.397		.335			.452		.470		.303					.533
	j)自宅や車に落書き			.492	.358				.561		.598	.261						.638
	g)自動車内の金品盗難			.164	.529				.401		.198	.599						.561
	e)自動車バイク盗難				.795				.632			.824						.679
	d)自転車盗難				.640				.409			.712						.507
	f)すり					.795			.632					.862				.743
	c)ひったくり					.789			.622					.844				.713
	r)テロまきこまれ						.815		.665						.866			.750
	s)銃器犯罪						.873		.762						.927			.859
	q)凶悪犯罪まきこまれ						.316	.549	.670					.416	.487			.722
	t)飲酒運転・ひき逃げ							.712	.507								.760	.578
	a)暴力的な犯罪							.690	.476								.765	.586
	i)悪質商法などの詐欺								.646									.748
	p)ネット犯罪								.627									.722
								.393									.521	
因子相関	F1:性的・つきまとい	1	.540	.548	.535	.727	.653	.734	.804	1	.576	.639	.661	.748	.647	.732	.802	
	F2:子どもが被害	.540	1	.478	.429	.412	.414	.598	.500	.576	1	.540	.551	.467	.426	.585	.495	
	F3:家・車を侵害	.548	.478	1	.542	.683	.564	.804	.791	.639	.540	1	.681	.775	.645	.891	.833	
	F4:車両が被害	.535	.429	.542	1	.673	.483	.679	.645	.661	.551	.681	1	.765	.570	.759	.726	
	F5:泥棒被害	.727	.412	.683	.673	1	.660	.799	.771	.748	.467	.775	.765	1	.691	.898	.804	
	F6:凶悪犯罪	.653	.414	.564	.483	.660	1	.773	.744	.647	.426	.645	.570	.691	1	.767	.759	
	F7:身体被害	.734	.598	.804	.679	.799	.773	1	.915	.732	.585	.891	.759	.898	.767	1	.877	
	F8:詐欺・ネット犯罪	.804	.500	.791	.645	.771	.744	.915	1	.802	.495	.833	.726	.804	.759	.877	1	
適合度	$\chi^2=409.21$ (df=135), $p<.001$ GFI=.968, AGFI=.950, CFI=.981, RMSEA=.040									$\chi^2=565.70$ (df=135), $p<.001$ GFI=.957, AGFI=.933, CFI=.977, RMSEA=.050								

(2) 不安感・リスク認知の因子分析(性別による多母集団同時解析)

前年度の調査報告書(第Ⅲ部第3章)では、前年度調査の不安感とリスク知覚の設問のデータに対して因子分析(主成分解、バリマックス回転)を実施し、性別によって因子数や軸構成が異なることを示唆する結果が報告されている。そこで、本項では、前項にて得られた検証的因子分析モデルを男女別にあてはめる多母集団同時解析を試みる。

無被害者に限ると、男性676名、女性689名であった。前項同様、欠測値をペアワイズ除去して男女別に共分散行列を求め、分析対象データとする。サンプルサイズは、欠測値を考慮して男性は600、女性は625として扱う。SEMの解法は最尤法とし、母集団間における等値制約の置き方に関して、次の5通りのモデルを試行し、結果を比較する。

- 1) 等値制約なし(配置不変)
- 2) 因子負荷量を等値とする(測定不変)
- 3) 因子負荷量、因子分散共分散を等値とする(強因子不変)
- 4) 因子負荷量、残差分散を等値とする
- 5) 因子負荷量、因子分散共分散、残差分散を等値とする(全て等値)

5通りのモデルの適合度指標と、モデル間の差の適合度検定の結果を以下に示す。

表Ⅲ－3－5 「不安感」の多母集団解析における適合度指標

	χ^2	df	χ^2/df	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
1) 配置不変(制約なし)	608.08	270	2.252	.953	.927	.976	.032	908.08
2) 測定不変	634.60	289	2.196	.951	.929	.975	.031	896.60
3) 強因子不変	714.32	325	2.198	.946	.930	.972	.031	904.32
4) 因子負荷と残差分散	671.22	309	2.172	.948	.929	.974	.031	893.22
5) 全て等値	764.65	345	2.216	.942	.929	.970	.032	914.65

表Ⅲ－3－6 「不安感」の多母集団解析におけるモデル比較の適合度検定の結果

(表頭のモデルが正しいという仮定のもと、表側のモデルの適合度を検定した結果の p 値を示す)

	1)	2)	3)	4)	5)
1) 配置不変(制約なし)	---	---	---	---	---
2) 測定不変	.116	---	---	---	---
3) 強因子不変	.000	.000	---	---	---
4) 因子負荷と残差分散	.009	.013	---	---	---
5) 全て等値	.000	.000	.000	.000	---

表Ⅲ－3－7 「リスク知覚」の多母集団解析における適合度指標

	χ^2	df	χ^2/df	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
1) 配置不変(制約なし)	721.27	270	2.671	.944	.914	.976	.037	1021.27
2) 測定不変	752.23	289	2.603	.942	.916	.975	.036	1014.23
3) 強因子不変	817.02	325	2.514	.938	.919	.973	.035	1007.02
4) 因子負荷と残差分散	785.32	309	2.541	.940	.919	.974	.036	1007.32
5) 全て等値	840.22	345	2.435	.936	.922	.973	.034	990.22

表Ⅲ－3－8 「リスク知覚」の多母集団解析におけるモデル比較の適合度検定の結果

(表頭のモデルが正しいという仮定のもと、表側のモデルの適合度を検定した結果の p 値を示す)

	1)	2)	3)	4)	5)
1) 配置不変(制約なし)	---	---	---	---	---
2) 測定不変	.041	---	---	---	---
3) 強因子不変	.001	.002	---	---	---
4) 因子負荷と残差分散	.007	.033	---	---	---
5) 全て等値	.001	.004	.279	.023	---

AIC 基準によれば、不安感については「4) 因子負荷量、残差分散を等値とする」が最良であり、リスク知覚については「5) 全て等値」が最良である。しかし、いずれのモデルも十分に良好な適合度を示している。よって、次節以降の SEM においては、男女別の多母集団解析とする必要はなく、性別は1つのダミー変数として扱うこととする。

参考までに、「1) 配置不変」のモデルにおける分析結果を表Ⅲ－3－9に示しておく。

表Ⅲ-3-9 不安感とリスク知覚の検証的因子分析
(男女別の多母集団同時解析、等値制約なしのモデル)

表中の数値は、上段:男性 下段:女性		不安感(問5)の検証的因子分析									リスク知覚(問6)の検証的因子分析								
		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	共通性	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	共通性
因子 負荷量 (標準化 パス係数)	h)痴漢	.619 .739								.383 .545	.812 .831								.660 .691
	o)つきまとい・のぞき	.520 .489	.140 .142	.312 .276						.701 .594	.369 .513	.147 .114	.461 .316						.720 .695
	n)子どもが性的被害	.188 .131	.752 .839							.771 .834	.187 .135	.787 .837							.836 .844
	l)子どもが不審者から声		.921 .949							.849 .900		.936 .931							.875 .867
	m)子どもが連れ去られる		.944 .952							.891 .905		.969 .961							.939 .923
	k)無断侵入			.853 .788						.727 .621			.851 .848						.723 .718
	b)自宅にどろぼう			.420 .349		.295 .387				.437 .454			.339 .459		.441 .306				.543 .515
	j)自宅や車に落書き			.455 .568	.403 .274					.560 .578			.476 .721	.403 .125					.639 .660
	g)自動車内の金品盗難			.183 .163	.541 .501					.430 .373			.125 .282	.658 .532					.556 .570
	e)自動車バイク盗難				.813 .768					.662 .589			.817 .826						.668 .682
	d)自転車盗難				.642 .648					.413 .420			.718 .713						.515 .509
	f)すり					.764 .808				.584 .653				.837 .871					.701 .759
	c)ひったくり					.765 .799				.585 .638			.835 .848						.698 .719
	r)テロまきこまれ						.806 .816			.650 .666				.849 .880					.720 .774
	s)銃器犯罪						.858 .887			.735 .787				.924 .932					.853 .869
	q)凶悪犯罪まきこまれ						.258 .334	.574 .553		.626 .704				.393 .425	.500 .490				.712 .733
	t)飲酒運転・ひき逃げ							.714 .709		.509 .502					.752 .764				.565 .583
	a)暴力的な犯罪							.681 .694		.463 .482					.762 .774				.581 .599
	i)悪質商法などの詐欺								.660 .635	.435 .403								.798 .705	
	p)ネット犯罪								.605 .645	.366 .416								.731 .712	.534 .507
因子 相関	F1: 性的・つきまとい	1	.596	.565	.450	.689	.626	.675	.792	1	.617	.616	.680	.699	.653	.702	.739		
	F2: 子どもが被害	.596	1	.482	.414	.436	.417	.572	.506	.617	1	.541	.532	.530	.468	.607	.495		
	F3: 家・車を侵害	.509	.482	1	.523	.701	.539	.770	.783	.550	.541	1	.652	.782	.653	.879	.786		
	F4: 車両が被害	.565	.481	.523	1	.701	.471	.653	.615	.665	.535	.652	1	.840	.598	.798	.712		
	F5: 泥棒被害	.450	.414	.578	.701	1	.513	.716	.682	.680	.532	.689	.723	1	.543	.723	.737		
	F6: 凶悪犯罪	.679	.459	.701	.701	.655	1	.828	.805	.681	.569	.751	.723	.663	1	.888	.816		
	F7: 身体被害	.732	.385	.675	.701	.659	.774	1	.899	.785	.411	.653	.725	.888	.725	1	.785		
	F8: 詐欺・ネット犯罪	.626	.417	.539	.471	.655	.776	.899	1	.653	.468	.653	.888	.752	.823	.899	1		
適合度	$\chi^2=608.08$ (df=270), p<.001 GFI=.953, AGFI=.927, CFI=.976, RMSEA=.032									$\chi^2=721.27$ (df=270), p<.001 GFI=.944, AGFI=.914, CFI=.976, RMSEA=.037									

(3) 地域状況の因子分析

本項では、地域状況など（問 36～38）の設問について、因子分析を実施する。分析方法の詳細は前項と同様である。最終的に得られた検証的因子分析のモデルを以下に示す。

表Ⅲ-3-10 地域状況の検証的因子分析(無被害者全員)

		地域状況(問36～38)の検証的因子分析						共通性
		F1	F2	F3	F4	F5	F6	
因子 負 荷 量 （ 標 準 化 パ ス 係 数 ）	Q36)警察は地域防犯に積極的	.753		-.138				.564
	Q37a)制服警官パトロール	.784						.614
	Q37b)警察官が各家庭に訪問	.536						.287
	Q37c)交番への常時配置	.495						.245
	c)樹木の管理が悪い		.808					.652
	b)街灯貧弱、夜暗い		.614					.377
	a)空き家が多い		.257	.207				.148
	d)ゴミ・吸い殻		.306	.344				.288
	e)スプレーで落書き			.644				.415
	i)路上に三輪車乗り捨て			.657				.432
	f)風俗産業など有害環境			.562				.316
	m)夜、たむろする若者				.836			.700
	h)未成年がたばこ				.772			.596
	g)非行少年たまり場				.757			.573
	l)昼、学校をさぼる中高生				.754			.569
	j)近所づきあいのない人					.854		.729
	k)トラブルを起こす人					.349	.351	.324
	o)暴力団とかかわる人						.729	.531
n)暴走族と関わる若者						.881	.776	
因子 相 関	F1: 警察活動	1	-.132	.106	.021	-.085	.056	
	F2: 不整備	-.132	1	.361	.330	.252	.234	
	F3: 無秩序	.106	.361	1	.827	.480	.714	
	F4: 少年非行	.021	.330	.827	1	.413	.838	
	F5: 近隣不信	-.085	.252	.480	.413	1	.325	
	F6: 暴力組織	.056	.234	.714	.838	.325	1	
適合度	$\chi^2=591.76$ (df=133), $p<.001$ GFI=.951, AGFI=.930, CFI=.943, RMSEA=.053							

適合度は良好であり、解釈も比較的容易にできる結果である。因子の解釈は次の通り。

- F1：警察活動（Q36、Q37の警察の地域防犯活動の活発さの評価）
- F2：不整備（樹木、街灯、空き家などの管理・整備が不足）
- F3：無秩序（落書き、乗り捨て、ゴミ、風俗産業など、マナーや秩序のなさ）
- F4：少年非行（中高生の喫煙、たむろなどの非行）
- F5：近隣不信（近所づきあいのない人、トラブルをおこす人）
- F6：暴力組織（暴力団、暴走族とかかわりのある人）

念のため、ここでも男女別の多母集団同時解析を試みた。前項同様の方法により、制約

の置き方の異なる5つのモデルについて分析を実行し、その結果を比較する。各モデルの適合度等を以下に示す。

表Ⅲ-3-11 「地域状況」の多母集団解析における適合度指標

	χ^2	df	χ^2/df	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
1) 配置不変(制約なし)	746.10	266	2.805	.939	.913	.939	.038	974.10
2) 測定不変	761.85	283	2.692	.938	.916	.939	.037	955.85
3) 強因子不変	790.50	304	2.600	.935	.919	.938	.036	942.50
4) 因子負荷と残差分散	817.12	302	2.706	.934	.917	.935	.037	973.12
5) 全て等値	841.96	323	2.607	.932	.920	.934	.036	955.96

表Ⅲ-3-12 「地域状況」の多母集団解析におけるモデル比較の適合度検定の結果

(表頭のモデルが正しいという仮定のもと、表側のモデルの適合度を検定した結果のp値を示す)

	1)	2)	3)	4)	5)
1) 配置不変(制約なし)	---	---	---	---	---
2) 測定不変	.542	---	---	---	---
3) 強因子不変	.220	.123	---	---	---
4) 因子負荷と残差分散	.000	.000	---	---	---
5) 全て等値	.001	.000	.000	.254	---

ここでは、AIC基準においては「3) 強因子不変(因子負荷量と因子分散共分散を等値とする)」が最良モデルとなった。しかし、「5) 全て等値」と「1) 配置不変(制約なし)」のモデル比較の検定は有意ではない。また、いずれのモデルも十分によい適合である。よって、前項の結論と同様、男女別の多母集団解析とする必要はなく、性別は1つのダミー変数として扱ってよいことを示唆する結果といえる。

4. 地域や個人の属性、地域状況、リスク知覚、不安感を含む因果モデルの構成

本節では、前節の因子分析の結果を、第1節で想定した因果モデル(図Ⅲ-3-1、図Ⅲ-3-2を参照)に組み込み、地域や個人の属性、地域状況、リスク知覚、不安感を含む全体モデルを構成する。

(1) モデル構成の方針

モデル構成の方針は次の通り。

1) リスク知覚と不安感の関係について

幸い、リスク知覚と不安感の因子配置は共通化できているので、両者の関係は、想定通り、①対応する因子間に「リスク知覚の因子→不安感の因子」の向きにパスを引き、②対応する観測変数の残差間に相関を設ける、という構造とする。

2) 地域状況とリスク知覚・不安感の関係について

「地域状況の因子→リスク知覚の因子」「地域状況の因子→不安感の因子」の向きに、全ての因子間にパスを設けたモデルを初期モデルとする。効果のないパスを削除し、最終的なモデルを探索する。

3) 地域や個人の属性に関する予備的検討

地域や個人の属性に関する項目と、不安感(問5)、リスク知覚(問6)、地域状況(問36~38)との間のクロス集計や相関係数などを概観する。その結果に基づき、モデルに採用する候補変数、およびそれら変数の数値変数化の方法(得点化、ダミー変数化、カテゴリー統合など)を決める。

4) 地域や個人の属性と、地域状況・リスク知覚・不安感の関係について

「地域や個人の属性→地域状況の因子」「地域や個人の属性→リスク知覚の因子」「地域や個人の属性→不安感の因子」の向きに、全てのパスを設けたモデルを初期モデルとする。効果のないパスを削除するほか、いずれの変数に対しても効果のない属性変数は、変数そのものをモデルから除外していく。

5) 因子の残差相関について

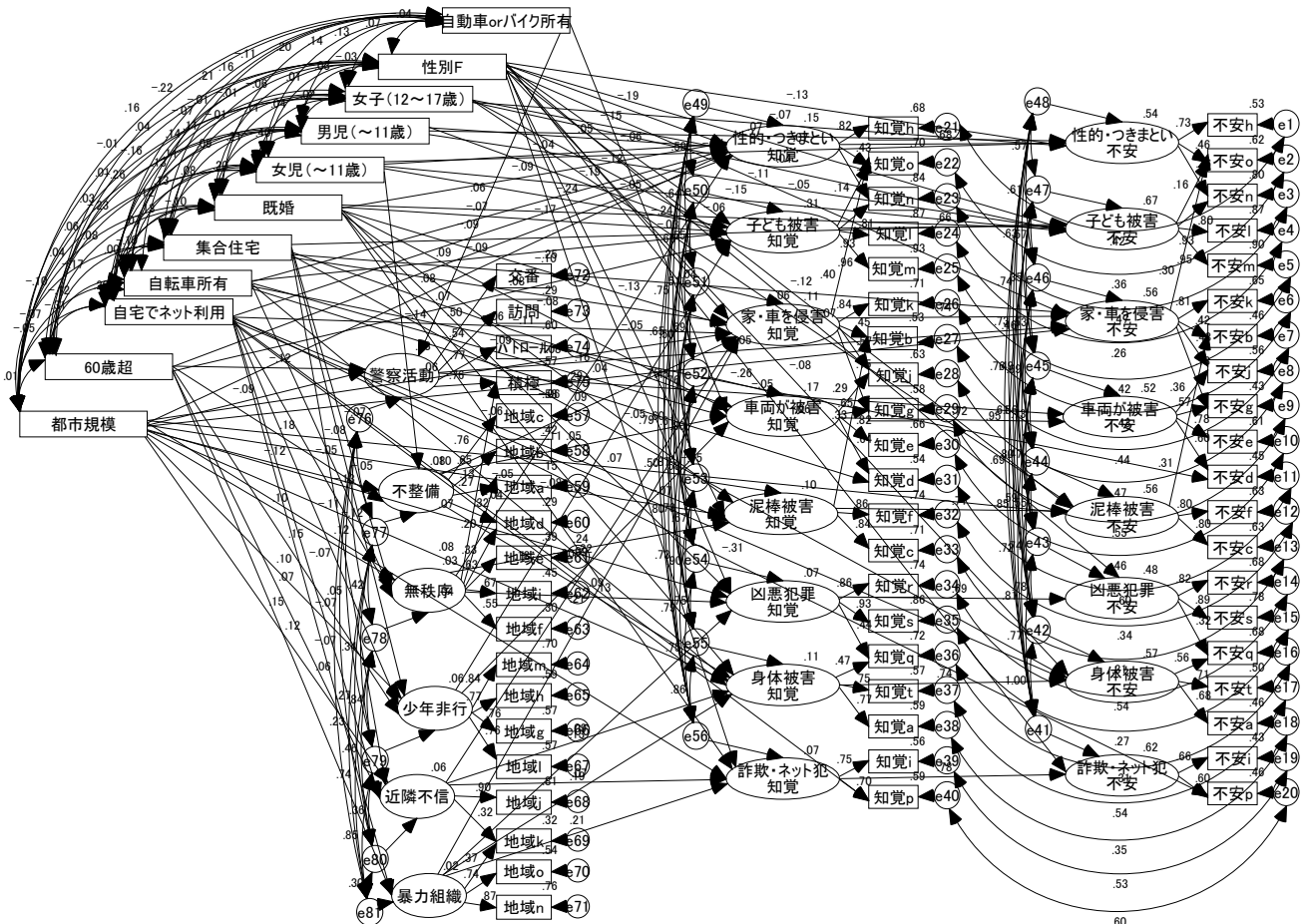
地域状況、不安感、リスク知覚の、それぞれの因子間にも因果関係があることが考えられるが、ここではその因果関係を同定することはせず、因子の残差相関として因子間の関係を表現しておく。

6) SEMの解法について

モデル探索の途上においては、前節同様、無被害者のデータ(1,365名)から欠測値をペアワイズ除去して求めた共分散行列を対象に、最尤法による分析を行う。サンプルサイズは欠測値の影響を考慮し、1,250相当として扱う。納得できるモデルが得られたならば、生データを分析対象として、欠測値を含むデータに対する有効性が知られているFIML法(完全情報最尤法、個々の観測個体に対する尤度を用いた最尤推定)による分析を実行して最終的な推定値を得る。

(2) 得られた因果モデルの概要

最終的に得られた因果モデルをパス図として図Ⅲ-3-3に示す。モデルの複雑さにより、パス図から何かを読み取るのは困難であるので、内容の考察には項をあらため、パス係数などを数表の形で適宜提示することとし、ここではモデルに含まれる変数、適合度等の概要のみ述べる。



(標準化解、 $\chi^2=4220.30$ (df=2083), $p<.001$, CFI=.962, RMSEA=.027)

図Ⅲ-3-3 得られた因果モデル

モデルには、外生観測変数 11 個（地域や個人の属性）、内生観測変数 59 個（地域状況 19 項目、リスク知覚と不安感が各 20 項目）、内生潜在変数 22 個（地域状況 6 因子、リスク知覚と不安感が各 8 因子）、計 92 個の構造変数が含まれる。構造変数間のパスが 186 本、外生変数・誤差変数間には 146 対の相関（共分散）が設けられている。

膨大で複雑なモデルであるが、適合度は良好である（ $\chi^2=4220.30$ (df=2083), $p<.001$, CFI=.962, RMSEA=.027）。

ただし、「不安感」因子の誤差変数の共分散行列が正定値でないという問題があり、厳密には不適解である。検討したところ、6 つの誤差変数が実際には 6 次元分の情報がなく、

5次元の情報しか持たないことに起因しているようであり、誤差変数を1つ減らし、5つの誤差変数が6つの因子の残差を形成するモデルとすれば解決する。しかしこの問題はモデル内の他の部分にはほとんど影響を及ぼさないため、とくに対処を必要としないと判断し、図Ⅲ-3-3のモデルを最終的なモデルとして採用することとした。

モデルに取り入れた個人や地域の属性変数を表Ⅲ-3-13に示す。都市規模については4段階（大都市ほど小さい値）をそのまま数値変数として用いる。他の属性変数は全て0-1のダミー変数である。変数名に該当する場合は1、該当しない場合が0となるようにコード化してある。

表Ⅲ-3-13 分析に用いた地域属性・個人属性の変数

変数名	設問	コード化(この数値をそのまま分析に用いる)	度数	%
都市規模	地点コードより	1:大都市(東京都区部、政令指定都市)	334	24.5%
		2:人口10万人以上の市	536	39.3%
		3:人口10万未満の市	316	23.2%
		4:町村	179	13.1%
60歳超	問40 回答者の年齢	0:20~59歳まで	953	69.8%
		1:60歳以上	412	30.2%
性別F	問39 回答者の性別	0:男性	676	49.5%
		1:女性	689	50.5%
女兒 (~11歳)	問47a) 同居家族	0:12歳未満の女の子がいない	1046	76.6%
		1:12歳未満の女の子がいる	265	19.4%
男児 (~11歳)	問47b) 同居家族	0:12歳未満の男の子がいない	1050	76.9%
		1:12歳未満の男の子がいる	261	19.1%
女子 (11~17歳)	問47c) 同居家族	0:12歳以上18歳未満の女の子がいない	1184	86.7%
		1:12歳以上18歳未満の女の子がいる	124	9.1%
既婚	問41	0:未婚、既婚の経験あり(離・死別)	346	25.3%
		1:既婚(現在、配偶者がいる)	999	73.2%
集合住宅	問45 住宅の建て方	0:一戸建て、その他	1080	79.1%
		1:集合住宅	283	20.7%
自動車 or バイク所有	問47g)およびf) 所有物	0:自動車・オートバイを所有していない	200	14.7%
		1:少なくとも一方は所有している	1128	82.6%
自転車所有	問47h) 所有物	0:自転車を所有していない	287	21.0%
		1:自転車を所有している	1043	76.4%
自宅で ネット利用	問47i) インターネットの利用	0:自宅でインターネットを利用していない	532	39.0%
		1:自宅でインターネットを利用している	795	58.2%

以下、観点ごとに項をあらため、因果モデルの内容を解釈・考察していく。

(3) リスク知覚から不安感への影響

このモデルでは、リスク知覚から不安感への影響を、対応する因子間のパスと、対応する観測変数間の残差相関（リスク知覚の観測変数の独自性成分から不安感の観測変数への影響を表す）として表現している。

対応する因子間の標準化パス係数を以下に示す。いずれの因子においても、0.7前後あるいはそれ以上の値を示しており、リスク知覚が不安感に大きな影響を与えていることがわかる。

表Ⅲ－3－14 リスク知覚の因子から不安感の因子への影響

原因変数	結果変数	標準化パス係数
性的・つきまとい_リスク知覚	→性的・つきまとい_不安感	0.685
子ども被害_リスク知覚	→子ども被害_不安感	0.661
家・車を侵害_リスク知覚	→家・車を侵害_不安感	0.737
車両が被害_リスク知覚	→車両が被害_不安感	0.718
泥棒被害_リスク知覚	→泥棒被害_不安感	0.706
凶悪犯罪_リスク知覚	→凶悪犯罪_不安感	0.686
身体被害_リスク知覚	→身体被害_不安感	0.738
詐欺・ネット犯_リスク知覚	→詐欺・ネット犯_不安感	0.781

不安感の観測変数に関しては、リスク知覚の因子から不安感の因子経由で及ぼされる影響と、対応するリスク知覚の観測変数との間の残差相関として表される影響（独自性成分からの影響）がある。そこで、前者についてはリスク知覚の因子から不安感の観測変数への標準化総合効果、後者については対応するリスク知覚の観測変数の残差と、不安感の観測変数との間の相関係数（残差間の相関係数に不安感の $\sqrt{1 - \text{決定係数}}$ を乗じて求められる。リスク知覚の残差から不安感の観測変数への標準化パス係数に相当する。）として評価することとし、それらの値を表Ⅲ－3－15にまとめて示す。

まず、リスク知覚の因子からの影響であるが、単独の因子から影響を受ける観測変数については標準化総合効果が0.5～0.6程度の、相当に大きい影響を受けている。複数因子から影響を受ける変数については、個々の値はそれほど大きくない場合があるが、全体としては、やはり大きな影響を受けている。

一方、独自性成分からの影響については、「リスク知覚の残差との相関」をみると、値の大小が項目によってかなり異なることがわかる。総じて、決定係数の小さい項目ほど値が大きいようである。これは、決定係数が小さい＝独自性が大きい、ということから、当然の傾向といえる。

以上の考察をまとめると、項目によって因子で説明される割合（共通性）が大きい場合とその項目独自の成分が大きい場合があるが、共通因子・独自因子とも、リスク知覚から不安感へ強い影響が及ぼされているといえる。

表Ⅲ－3－15 不安感の観測変数へのリスク知覚の影響

不安感の観測変数	リスク知覚の因子からの標準化総合効果							決定係数	残差からの標準化パス係数	リスク知覚との残差相関	リスク知覚の残差との相関
	性的・つきまとい	子ども被害	家・車を侵害	車両が被害	泥棒被害	凶悪犯罪	身体被害				
h)痴漢	.497							.528	.687	.419	.288
o)つきまといのぞき	.317	.109	.218					.624	.613	.363	.223
n)子どもが性的被害	.111	.528						.798	.449	.467	.210
l)子どもが不審者から声		.618						.873	.357	.262	.094
m)子どもが連れ去られる		.628						.901	.314	.417	.131
k)無断侵入			.596					.653	.589	.427	.251
b)自宅にどろぼう			.308		.220			.460	.735	.438	.322
j)自宅や車に落書き			.352	.257				.562	.662	.472	.312
g)自動車内の金品盗難			.099	.406				.429	.755	.546	.412
e)自動車バイク盗難				.563				.614	.621	.464	.288
d)自転車盗難				.428				.452	.740	.596	.441
f)すり					.562			.633	.606	.342	.207
c)ひったくり					.562			.634	.605	.312	.189
r)テロまきこまれ						.565		.679	.566	.545	.309
s)銃器犯罪						.607		.785	.464	.267	.124
q)凶悪犯罪まきこまれ						.217	.410	.677	.569	.314	.179
t)飲酒運転・ひき逃げ							.522	.501	.706	.542	.383
a)暴力的な犯罪							.502	.464	.732	.353	.259
i)悪質商法などの詐欺								.515	.434	.752	.399
p)ネット犯罪								.466	.457	.737	.603

(4)地域状況からリスク知覚・不安感への影響

地域状況の因子から、リスク知覚の因子・不安感の因子への標準化パス係数を表3-4-4に示す。探索的なモデリングの結果、結局、「警察活動」以外の地域状況の因子からは、直接的にはリスク知覚の因子に影響があり、不安感に対してはリスク知覚経由で間接的に影響するというモデルとなった。

どんな地域状況がどんなリスク知覚・不安感に影響を与えるかは様々である。以下、具体的に述べる。

まず、様々な因子に小さくない影響を与えているのが「無秩序（落書き、乗り捨て、ゴミ、風俗産業など、マナーや秩序のなさが感じられる）」と「暴力組織（暴力団、暴走族とかかわりのある人がいる）」である。「無秩序」は「性的・つきまとい」「泥棒被害」「凶悪犯罪」のリスク知覚を増大させ、「暴力組織」は「家・車を侵害」「凶悪犯罪」「身体被害」「詐欺・ネット犯罪」のリスク知覚を増大させる。

「少年非行（中高生の喫煙、たむろなどの少年非行が目立つ）」は、特に「子ども被害」と「車両が被害」のリスク知覚に影響を与える。

「不整備（樹木、街灯、空き家など、環境の管理・整備が不足）」は、「家・車を侵害」「車両が被害」「身体被害」のリスク知覚を増大させるが、その影響は大きくない。

また、「近隣不信（近所づきあいのない人、トラブルをおこす人がいる）」は、「家・車を侵害」「身体被害」「詐欺・ネット犯罪」のリスク知覚を増大させるが、その影響は大きくない。

「警察活動（警察の地域防犯活動の活発さを評価）」のみ、リスク知覚ではなく不安感に、ごく小さい影響を与えている。警察活動の活発さが認識されることは、「家・車を侵害」「車両が被害」の不安感をわずかに低減させる効果がある。

表Ⅲ-3-16 地域状況からリスク知覚・不安感への標準化パス係数

		地域状況の因子					
		警察活動	不整備	無秩序	少年非行	近隣不信	暴力組織
リスク知覚の因子	性的・つきまとい			.165			
	子ども被害				.177		
	家・車を侵害		.087			.089	.207
	車両が被害		.050		.222		
	泥棒被害			.237			
	凶悪犯罪			.135			.128
	身体被害		.093			.090	.189
	詐欺・ネット犯					.071	.214
不安感の因子	性的・つきまとい						
	子ども被害						
	家・車を侵害	-.052					
	車両が被害	-.051					
	泥棒被害						
	凶悪犯罪						
	身体被害						
	詐欺・ネット犯						

(5) 地域属性・個人属性の影響

地域や個人の属性から、地域状況、リスク知覚、不安感への影響を表すパス係数を表Ⅲ-3-17に示す。ダミー変数（都市規模以外の属性変数）については標準化を行うと分かりにくくなるので、ダミー変数のみ標準化なし、その他の変数は標準化した状態でのパス係数を表示している。すなわち、ダミー変数の場合は、標準化した結果変数に対する「水準0と水準1の差」を表すことになる。

原則としては地域・個人の属性からのパスは、地域状況・リスク知覚・不安感の因子に対して設けているが、「自転車所有」という属性と「d) 自転車盗難」のリスク知覚・不安感、「自宅でネット利用」という属性と「p) ネット犯罪」のリスク知覚・不安感の間には強い関係があるので、リスク知覚・不安感の観測変数に対して直接的にパスを設けている。

表Ⅲ-3-17 地域や個人の属性から地域状況・リスク知覚・不安感へのパス係数

*0-1のダミー変数(都市規模以外の原因変数)は標準化なし、その他の変数は標準化した状態でのパス係数を表示している		地域属性・個人属性										
		都市規模	60歳超	性別 F	女兒 (~11歳)	男兒 (~11歳)	女子 (12~17歳)	既婚	集合住宅	自動車 or バイク所有	自転車所有	自宅でネット利用
地域状況の因子	警察活動	-.093	-.252							.181		
	不整備	-.118	.400		-.357							
	無秩序	.104							-.162		-.203	-.109
	少年非行	.099	.317						-.118			-.215
	近隣不信	.151	.157						-.303			-.152
	暴力組織		.269									-.133
リスク知覚の因子	性的・つきまとい	.083	.203	-.379	-.093	.136	-.508	-.204			-.175	-.179
	子ども被害		.160	-.124	-.597	-.484	-.397	-.386			-.230	
	家・車を侵害	.059		-.108				-.236	.196			-.117
	車両が被害							-.192	-.265	-.684	-.225	
	泥棒被害	.095		-.262				-.174				-.113
	凶悪犯罪	.075		-.091				-.131				
	身体被害	.084						-.262			-.125	-.079
	詐欺・ネット犯	.044		-.110				-.187				
不安感の因子	性的・つきまとい			-.260	-.095	.167	-.230					
	子ども被害			-.144	-.379	-.276	-.137	-.133	-.067			
	家・車を侵害	.042		-.091					.103			
	車両が被害											
	泥棒被害	.075		-.243			.190					
	凶悪犯罪			-.139								
	身体被害			-.159					-.122			-.134
	詐欺・ネット犯			-.111								
観測変数	p)ネット犯罪_知覚											-.604
	p)ネット犯罪_不安											-.624
	d)自転車盗_知覚										-.704	
	d)自転車盗_不安										-.622	

以下、属性変数ごとに、その影響を概括する。なお、結果変数は、警察活動を除き、値が小さい方が（パス係数が負の場合）悪い状況（地域状況が悪い、リスク知覚・不安感は大い）を表すことに注意しておく。

1) 都市規模

都市規模は、値が小さい方が都市の規模が大きいことを表す変数である。よって、多くの結果変数に対して、都市規模が大きい方が悪い状況にあることがわかる。ただし、その影響はそれほど大きいものではないが、「近隣不信」への影響は比較的大きい（パス係数 = .151）。また、「不整備」のみ、都市規模が小さい場合に評価が若干悪くなる。

2) 回答者の年齢（60歳超）

回答者自身の年齢が60歳以上の場合、総じて、地域状況に悪い評価が少なくなる（甘くなる？）。犯罪被害に関しては、「性的・つきまとい」「子ども被害」のリスクを知覚が若年層に比べて感じにくい。その他のリスク知覚・不安感に対しては、直接的な効果はないが、地域状況を通して間接的には影響がある（不安感・リスク知覚とも若年層の方が高い）。

3) 性別

地域状況の評価に性別による違いはみられない。犯罪被害に関しては、多くの因子について、女性の方がリスクを知覚し、不安感も大きい。特に「性的・つきまとい」については男性との違いが大きい。

4) 同居家族に女兒・男児（12歳未満）、女子・男子（12歳～18歳未満）がいるか

同居家族に子どもや青少年（以下、子どもと表現）がいる場合、「性的・つきまとい」「子ども被害」のリスク知覚・不安感に大きな影響がある。ただし、子どもの年齢・性別によってその影響力は異なる。まず、12歳～18歳未満の男子がいても、ほとんど影響がない（よって、モデルから除外している）。「子ども被害」に対しては、女子の方が、また、年齢層が低い方が、リスク知覚・不安感が大きい。「性的・つきまとい」については、12歳～18歳未満の女子がいるとリスク知覚・不安感が非常に高くなるが、12歳未満の女子の場合はわずかに高まるだけである。また、12歳未満の男子がいる場合は、逆にリスク知覚・不安感が若干低くなる。

5) 配偶者の有無（既婚）

現在配偶者がいる人は、いない人に比べて、全ての犯罪被害のリスク知覚が大きくなる。「子ども被害」については、不安感への直接的な影響も生じている。

6) 住居の建て方（集合住宅か戸建て住宅か）

集合住宅に住む人は、戸建て住宅に比べて、地域状況を「無秩序」「少年非行」「近隣不信」の点で評価が悪い。犯罪被害に関しては、「車両が被害」「身体被害」については集合住宅居住者の方がリスク知覚または不安感が大きい、「家・車を侵害」については戸建て住宅の方がリスク知覚・不安感が大きい。

7) 自動車・バイク・自転車の所有

自動車またはオートバイを所有している場合、「車両が被害」のリスク知覚が所有していない人に比べて大きく増大する（というよりも、逆に非所有者のリスク知覚は低い、と

いうべきか)。また、所有者は「警察活動」の評価が低くなるが、これは自身が取り締まられる対象になりうることから、警察組織への印象が悪くなるのかもしれない。

自転車の所有に関しては、「自転車盗難（観測変数）」のリスク知覚・不安感に対して大きな影響がある。この当然の効果以外に、所有者は地域状況を「無秩序」と感じ、「性的・つきまとい」「子ども被害」「身体被害」のリスクを非所有者に比べて若干高めに感じている。

8) 自宅でのインターネット利用

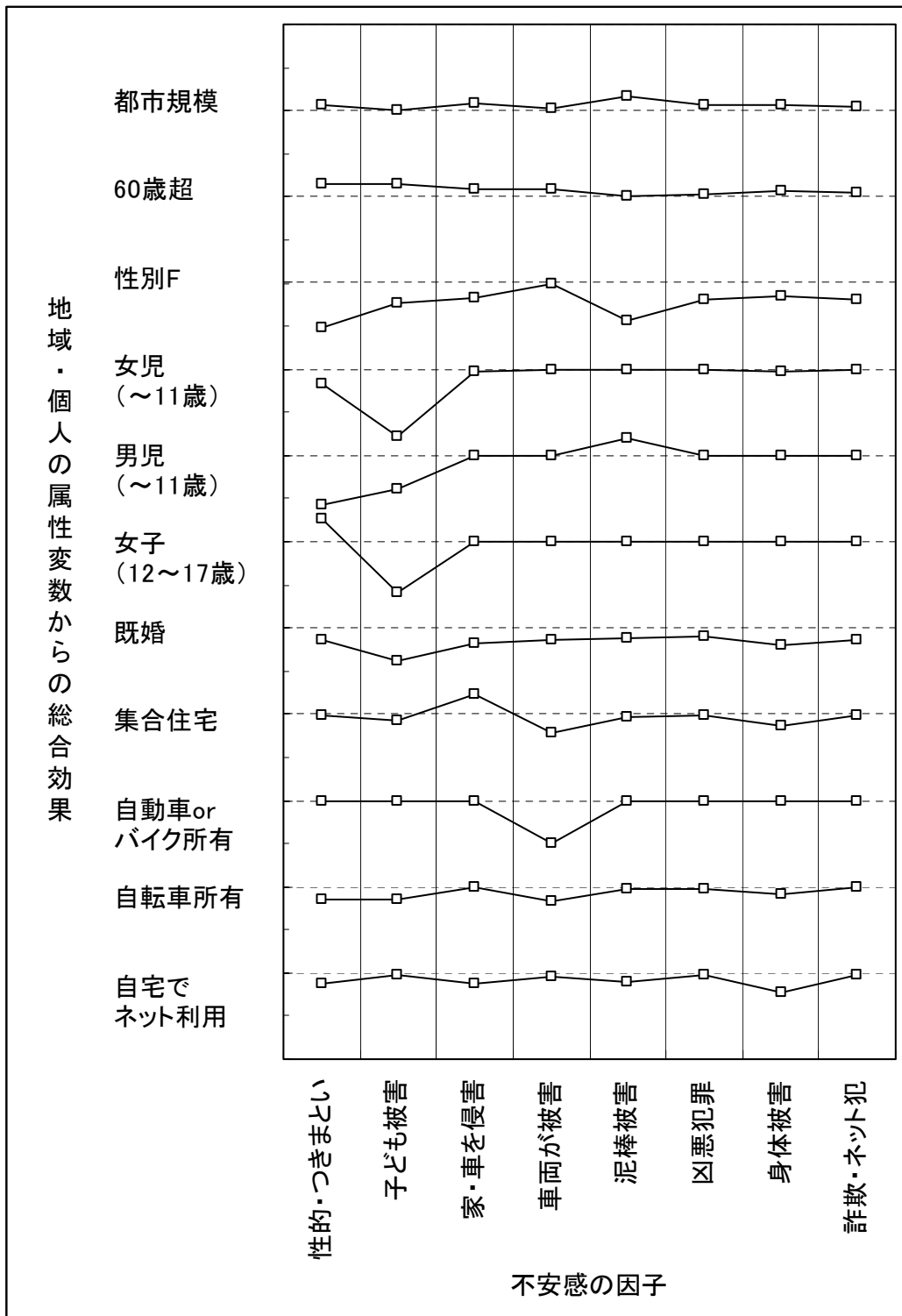
「ネット犯罪（観測変数）」のリスク知覚・不安感に対して大きな影響がある。また、ネット利用者の方が非利用者に比べて、総じて地域状況を悪く評価し、4つの犯罪被害種類のリスク知覚・不安感が大きくなっている。影響の度合いはそれほど大きなものではないが、地域状況の「少年非行」、犯罪被害の「性的・つきまとい」リスク知覚に対する効果は比較的大きい。

以上の考察は、パス係数すなわち直接効果に基づくものであるが、地域状況の因子経由でリスク知覚・不安感への間接効果を考慮すると、直接的にはパスのない不安感の因子にも影響が及ぼされている場合がある。そこで、地域や個人の属性から不安感の因子への総合効果を表Ⅲ-3-18に、さらにそれをグラフ化して図Ⅲ-3-4に示す。

直接効果による考察と矛盾するところはないが、不安感への影響の定量的な評価には、この総合効果の値を用いるのがよいと思われる。

表Ⅲ-3-18 地域や個人の属性から不安感の因子への総合効果

*0-1のダミー変数(都市規模以外の原因変数)は標準化なし、その他の変数は標準化した状態での総合効果を表示している		地域属性・個人属性										
		都市規模	60歳超	性別 F	女兒 (~11歳)	男兒 (~11歳)	女子 (12~17歳)	既婚	集合住宅	自動車 or バイク所有	自転車所有	自宅でネット利用
不安感の因子	性的・つきまとい	.069	.139	-.520	-.160	-.576	.261	-.140	-.017		-.143	-.134
	子ども被害	.012	.144	-.226	-.773	-.399	-.597	-.389	-.081		-.153	-.024
	家・車を侵害	.092	.089	-.170	-.022			-.174	.226	-.008		-.116
	車両が被害	.016	.078		-.012			-.137	-.209	-.500	-.160	-.035
	泥棒被害	.160		-.428		.191		-.124	-.027		-.034	-.098
	凶悪犯罪	.061	.024	-.202				-.089	-.015		-.019	-.022
	身体被害	.064	.076	-.158	-.025			-.192	-.143		-.092	-.222
	詐欺・ネット犯	.043	.054	-.196				-.146	-.017			-.031



図Ⅲ-3-4 地域や個人の属性から不安感の因子への総合効果
 (破線が総合効果0、破線と破線の間隔が1)

5. まとめ

本章では、過去1年間に犯罪被害を経験していない回答者のデータを用いて、地域や個人の属性、地域状況の認知、犯罪被害のリスク知覚および不安感の間の因果関係について、SEMによる分析を実施した。分析結果の要点を以下にまとめる。

- 1) リスク知覚と不安感の検証的因子分析により、各8因子のモデルを得た。両者の因子構造は一貫しており、いわゆる配置不変性が成立していることが分かった。さらに、男女別の多母集団同時解析により、性別が異なっても少なくとも配置不変は成立し、さらに強い意味での構造不変性も成立しうるとの結論を得た。
- 2) 地域状況の認知に関する設問に関しても検証的因子分析を実施し、6因子のモデルを得た。
- 3) 個人や地域の属性、地域状況の認知、リスク知覚および不安感の間の因果関係を表現した因果モデルを得た。適合度等の結果は良好であった。
- 4) リスク知覚から不安感への影響は、リスク知覚の因子から不安感の因子への影響と、リスク知覚の各項目独自の成分からの影響に分解して表現した。因子間の影響は各因子とも標準化パス係数 ≈ 0.7 程度と、かなり強い影響である。
- 5) 地域状況の認知からリスク知覚・不安感への影響は、「警察活動」を除き、直接的に影響を与えるのはリスク知覚の因子に対してであった。不安感に対しては、リスク知覚を介して間接的に影響を与えるという構造である。特に、地域状況に対して「無秩序(落書き、乗り捨て、ゴミ、風俗産業など、マナーや秩序のなさが感じられる)」と「暴力組織(暴力団、暴走族とかかわりのある人がいる)」という認知の影響は大きい。前者は「性的・つきまとい」「泥棒被害」「凶悪犯罪」、後者は「家・車を侵害」「凶悪犯罪」「身体被害」「詐欺・ネット犯罪」という、それぞれ異なった犯罪被害のリスク知覚を増大させる。
- 6) 個人属性の影響については、総じて、「子どもがいる」「配偶者がいる」「女性である」といった回答者のリスク知覚や不安感が高い。被害種別としては、「性的・つきまとい」「子ども被害」「泥棒被害」などが、こうした回答者属性による影響が大きい。60歳以上の回答者は地域状況の認知が好意的であり、間接影響により不安感も若干低くなる。逆に、自宅でインターネットを利用している回答者は地域についてよくない状況であると認知しており、犯罪被害のリスク知覚・不安感にも影響を及ぼしている。
- 7) 都市規模の影響としては、総じて都市規模が大きくなるほど、リスク知覚や不安感が大きくなる。